

<b>Title</b>	魂のことをする
<b>Author(s)</b>	片柳, 榮一
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume26, 2011.3 : 152-170
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3264">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3264</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 魂のことをする

片柳 榮 一

### はじめに

私は、これまで大学で、宗教、なかでもキリスト教について考え、教えてきた者ですが、そうした営みの中で、自分自身の問題としても、今日宗教とは私たち人間にとつていかなる意味があるか、という根本的な問いから問い直さねばならないということをますます感じてきています。言葉を換えれば、科学がこれほど発達した現代においてもなお意味をもちうる人間の宗教性とでもいうべきものは、どこに求むべきかという問題です。

その端緒になるものとして、魂という問題があるように思います。さまざまな宗教において、人々が魂という言葉で語ろうとしてきたことを、現代の状況の中で、理解し直すということを通して、現代における人間の宗教性を捉え直すことができるように思われます。私が「魂」ということで考えようとしているのは、人間が死んだあと、死体となつた身体から抜け出て、墓場の辺りをさまよっている「ひとだま」といったものことではありません。「ところ」でもよいのかもしれませんが、心は現代においても人々は抵抗なく、使う言葉です。心理学などは大流行

ですが、宗教が問題にする「私を超えたものと、それに対する私の関わり」或いは「日常的なものとは少し異質なもの」というのは、「こころ」では言い表しきれず、「魂」という言葉の方が、私が問題にしようとする「現代人の宗教性」の問題にはふさわしいように思われます（結論を先取りして言えば、それはそれぞれが、自分の人生を一時的なものとして生きているその事実の厳肅さということです）。

今日の話のタイトルに挙げた「魂のことをする」という言葉は、作家の大江健三郎が、オーム真理教の問題があった後、その問題を踏まえて書いた『宙返り』という小説の最後に主人公に言わせた言葉です。「教会という言葉は、私らの定義で、魂のことをする場所のことです」。彼が、その頃テレビのインタビュで「私は最近、魂のことをするということを考えています」と述べていたのが印象深く耳に残っていました。「魂のことをする」といういさかきこちな言ひ回しに、私が常々模索していたことと触れ合うものがあるような気がして、記憶に残っていました。偶然手にした『宙返り』という小説の最後に、この「魂のことをする」という表現を見出して、彼がインタビュで述べたことは、思いつきで言ったことではなかったのだ、と感銘を新たにしました。私の問題が狭いサークル内での問題でなく、現代人、現代の日本人の共通の問題なのだという確信を与えられたように思いました。

### 自分だけに定められた門

ここまでは前置きですが、本題に入ろうと思います。私が魂ということを考えていることをよく言い表してくれていると思われる一つの短編小説を紹介したいと思います。これは現代小説の原型をつくったと言われる、チェコのユダヤ人作家カフカ（一八八三—一九二四）が書いた『掟の前』(Vor dem Gesetz) という作品です。カフカは四

○歳ほどで無名のまま結核で亡くなりますが、死ぬ間際に友人のマックス・プロートに、自分の作品は失敗だから全部焼いてくれと言ったそうですが、プロートはそうせず、少しずつその原稿を雑誌に掲載し、しだいにその真価が認められ、現代小説のいわば元祖と言われるようになったのです。<sup>2)</sup>

「掟の前に門番が立っていた。この門番のところに田舎から一人の男がやってきて、掟の中に入ることを願った。しかし門番は言った、今は願いを聞いて入場を認めてやるわけにはいかないよ。この男は考え込み、それから尋ねた、すると後からなら入れてもらえるのかと。それはあり得るが、今は駄目だと門番は言った。掟への門はいつものように開いており、門番は脇へ退いてしまったので、男は身を屈めて、門の奥を覗きこんだ。門番はこれに気づくと笑って言った、そんなに気に入ったのなら、わしの禁止など無視して試しに入ってみたらどうだ。しかし気をつけるが良い、わしは力が強いぞ。それでもわしは一番下の門番なのだ。広間から広間へと次々に門番が立っており、各々段々強くなって行く。三番目の門番を見るのもわしには耐えられないくらいだ。田舎出の男はそんな困難など考えもしなかった。掟は誰に対しても、またいつでも開かれているはずだと彼は考えた。しかし毛皮の上衣を着た門番の大きな鼻、長く薄く黒々とした顎鬚を上げしげと見た後、この男は、入場の許しを得るまでむしろ待とうと決心した。門番はこの男に椅子を持ってきてやり、この男を門の脇に座らせた。そこにこの男は座り、日が過ぎ、年が過ぎていった。この男は入れてもらおうと様々な試みをし、しきりに願って門番をうんざりさせた。門番は時々この男に些細な質問をし、この男の故郷のことや他の様々のことを尋ねたが、それはお殿様がするような関心のないどうでもよい質問であった。そして最後にはいつも決まって、未だ入れることはできないと言うのだった。この男は旅の備えに多くのものを

持つてきていたが、それら全てを使い果たした、それらは門番を買収するというにはもったいないほどのものだったのだが。門番は確かに全てを受け取ったが、その際言うのだった、わしは受け取るが、それはお前が何かやり残したことがあると思わないためにだぞと。何年もの間、この男は門番をほとんど始終観察していた。彼は他の門番のことは忘れ、この最初の門番が掟に入るための唯一の障害のように思った。男は不運を呪った。最初の数年はあたりかまわず、大声で呪っていたが、後に年をとつてくると、独り言のようにぶつぶつと呪いの言葉を口にするようになっていた。男は子供っぽくなつていった。長年門番を観察する中で、門番の毛皮の襟元に蚤を見つけたが、男はこの蚤にまで、自分を助けて門番の気持ちを変えてくれと頼む始末であつた。とうとうこの男の目の輝きも弱つてきて、自分の周りが本当に暗くなつてきたのか、それとも目の錯覚なのかさえわからなくなつてきた。それでも彼は暗がりの中で、一つの輝きを認めた。それは掟の門の方から消し難く射してくるものだった。もはや男の命は長くなかつた。死を前にして男の頭の中で、これまでの全期間のあらゆる経験が、一つの問いへと凝縮していった。男がこれまで一度も門番に問わなかつた問いである。男は門番にうなづきかけた。男は硬直してゆく身体をもはや起こすこともできなかつたのである。門番は男の方に深く身を屈めねばならなかつた。身体の大きさの違いも男の方に分の悪いように変わつてしまつていたからである。今になつてまだ何を尋ねたいというのだ、お前はいつまでも物好きだと門番は尋ねながら言つた。男は言つた。全ての人が、掟を求めて努めているというのに、何年もの間、私以外に、誰も許可を求めに來なかつたのはどうしてなのかと。門番は男が死にかけているのを認めて、聞き取れなくなつてゐる耳元に届くように、大声で言つた、誰も他にここで許可を貰う者はいない。何故ならこの入り口は、唯お前だけに定められてゐるものなのだから。さあ、もう行くよ。門を閉めるのだ」(カフカ、『掟の前』私訳)

この小説をカフカは非常に気に入っていたようで、彼が生前発表した数少ない短編小説集『田舎医者』に納められただけでなく、未完に終わった長編小説『審判』の結びの前の章のところで、伽藍で出会った僧侶と、この話について、長々と解釈をしています。しかもこの解釈を読むことで、著者自身がこの話に何を託したかが直接分かるようになるというのではなく、ますます話は謎めいてくるというような仕掛けになっています<sup>3)</sup>。

もちろんこの話のポイントは、最後のところにあります。掟に入ろうとすべての人々が努めているのに、何十年の間、この掟の門に私の他、誰も来なかったのは何故か、という田舎出の男の問いに対して、「この入り口は唯お前だけに定められたものだ」というところですが、これは奇妙ですが、ドキッとします。そしてこの短編が多くの人々を捉えたのも、この門番の奇妙な言葉を伴った結果が、人事でないと漠然と感じさせるものをもっているからだと思います。自分だけに定められた門に入らず、その前に佇んだまま、死んでしまう、という最も愚かしく、また悲しいことが起きています。しかしまたその奇妙さもここで際立っています。門があり、道があるという日常生活の世界においては、門や道は、みんなのものであり、みんなに開かれたものです。それなのにここでは、門番はお前だけに定められていたから、他には誰もここに来なかったのだと言います。一体この「門」とは何なのでしょうか。この短編のタイトルは「掟の前」というものです。この門は掟の門なのです。これ自身が何のことか、いろんな議論、意見があります。彼が生い育ったユダヤ教的な宗教的伝統があり、理解をむずかしくしていますが、私の解釈だけを言っておきます。「掟の門」とは平たく言えば、生きてゆくこと、と言えると思います。それが掟であるということはどういふことなのか。掟というのは、こうしなければならぬ、ああしなければならぬということですが、私たちが生きてゆくとともに、これでよいのか、あさすべきであつたのではないか、と自分に問い、他

から問われています。そんなことはめんどくさい、そんなこと考えないで、やりたいようにすればいいんだ、と居直るとしても、それでいいんだ、と自分に言い聞かせているのです。我々は居直るにしても、それで良いと言わざるをえないのです。いずれにしても我々が生きてゆくということは、このように過ごして良いか悪いかを自らに問い、また他から問われてなされてゆくものです。確かに我々が生きてゆく、ということは、カフカがこの奇妙な短編小説に描いたようなものです。私たちは、いまこのチャペルに多数集まっています。みんなと一緒に学び、語り合っています。どこにも自分だけなどと言えるものはありません。今の時代に共に生きています。にもかかわらず、それでもそれぞれは、他の人に代わってもらえない、自分だけの生を歩まねばならないのです。この「他の人に代わってもらえない」というところが、「生きる」ということの独特の秘密であり、このカフカの短編小説のポイントであると思います。

この男は、門番に入ることを阻まれて、許しが出るまで、待つことにしました。自分から、困難を覚悟し、乗り越えて門に入るのではなく、誰かが入れてくれるのを待っていたのです。自分で決めるのではなく、「みんなで渡れば怖くない」式に、みんなを待っていたとも言えます。その結果、死ぬまで、自分にだけ定められた門の傍らに佇んでしまったのです。この物語を読んでいると、この田舎出の男に自分を重ね合わせている、カフカの心の奥底の悲鳴とでもいうものが聞こえてくるような気がします。保険局の役人として平凡な日々の生活を重ねていたカフカは、自分の生涯が、この男と同じく、自分の門に入らないまま終わってしまうのではないか、との不安と恐れに苛まれていたのでしょうか。この短編が多くの人々を捉え、様々に議論されてきたのも、人々が、ここに自分の姿がくつきり映し出されていることを感じてきたからだろうと思います。

しかしこの「自分だけに定められた門」というのは謎めています。そんなものあるはずがない、みんなと共通

の門、共通の人生があるだけだ、と反論したくなります。カフカも暗示するだけで、この門が如何なるものであるのかなどはこれ以上一切語っていません。

### 生の意味についての問いの「コペルニクス的転回」

私はこの「自分だけに定められた門」の謎に、或る一つの光、或るヒントを与えらると思われ、もう一つの記事を紹介したいと思います。

それはオーストリアの精神病理学者のヴィクトール・フランクルという人の書いた『夜と霧』という自伝的報告の中にあるものです。『夜と霧』というのは原題ではなく、訳者の霜山徳爾さんという人が作ったもので、原題は『一人の精神病理学者、強制収用所を体験する』(Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager) というものです。一人のユダヤ人医師がナチスの強制収容所の地獄を生き延びた体験を記したものです。この原題は、日本語では、少し軽薄な体験記というイメージを与えてしまうので、日本語訳者の霜山さんは『夜と霧』という印象的な題にしたのだらうと思います。素晴らしい書き換えです。

フランクルは或る日突然、自分がユダヤ人であるというただそれだけの理由で、逮捕され、強制収用所に送り込まれてしまいます。持っていた財産だけでなく、精神科医として約束されていた希望に満ちた未来のすべて、優しい夫人との幸福な家庭とその生活のすべてを奪われて収容所に送りこまれます。シャワー室の前で着ていたすべてを脱がされて水を浴びたとき、これまでのすべてが文字通り剥ぎ取られたと感じたと語っています。恐ろしい絶望の日々が始まります。しかし彼は自分が精神科医であることを自覚しており、すべてを奪われているが、少なくとも



も自分に起こるすべて、自分の周囲の人々に起こるすべてを見つめ、観察することだけはし続けようと心に決めます。

すべての望みを奪われた苦悩と絶望の闇の中で、人々が最初に無意識のうちに共通になすことは、この苦悩と絶望の痛み慣れようとすることであり、石のようにもはや痛みや喜びを感じないようにすることだったと述べています。「無感覚、感情の鈍磨、内的な冷淡と無関心……収容所囚人の心理的反應の第二の段階のこれらの特徴は、彼をまたまもなく毎日の、毎時間の殴打に対しても無感覚にさせた。この無感動こそ、当時囚人の心を包む最も必要な鎧兜であった」(同書、一〇三—四頁)

しかしこのような麻痺状態にまどろまざるをえない時期を経て、フランクはすこしづつ気づくことがあります。このドキュメントの中で、最も貴重な洞察であり、この書の頂点と言えるところで彼は記しています。

「精神的自由、すなわち環境への自我の自由な態度は、この一見絶対的な強制状態の下においても、外的にも、内的にも存し続けたという、ことを示す英雄的な実例は少くないのである。強制収容所を経験した人は誰でも、バラックの中をこちらでは優しい言葉、あちらでは最後のパンの一片を与えて通ってゆく人間の姿を知っているのである。そしてそれが少数の人数であったにせよ——彼らは、人が強制収容所の人間から一切を奪い取るかもしれないが、しかしたった一つのもの、すなわち与えられた事態に或る態度をとる人間の最後の自由を奪うことはできないということの証明力を持っている。「あれこれの態度をとることができる」ということは存するのであり、収容所の毎日毎時がこの内的な決断を行う数千の機会を与えたのであった。その内的決断とは、人間からその最も固有なもの——内的自由——を奪い、自由と尊厳を放棄させて、外的条件の単なる玩弄物と

し、「典型的な」收容所囚人に鑄直そうとする環境の力に陥るか陥らないか、という決断である」<sup>(2)</sup>

先に見たように、フランクは收容所の中で、はじめは自分を含め人々が一樣に、絶望し、ハリネズミのように身を守るために、感情を殺し、石のように何も感じないようになっていくさまを見つめました。しかし次第に一人ひとりの反応に差があることを知るようになります。人間は決して、壁に投げられるボールのように、或る角度に投げられれば、同じ方向に向かうというのではなく、或る人々は単に自らの運命を呪い、絶望しているだけなのに、別の人々は「バラックの中をこちらでは優しい言葉、あちらでは最後のパンの一片を与えて通つてゆく」のでした。フランクはあらためて、「あれこれの態度をとることができる」ということのまぶしいような意味をかみ締めています。単にあれこれの選択ではなく、選択できるといふ自分を選ぶか、単に状況に流されるだけにするか決断、選択の前に立たされていると感じています。彼は、ぎりぎりの決断の前に立っています。単にボールのように無反応に、状況に流されるか、そのような環境全体に抵抗して、あれこれの態度を取ることができるといふことです。あれこれの態度を取ることができるといふこと、これは二千年以前にすでにストア哲学の賢者たちが発見していました。暴虐な独裁者、皇帝に対して、自らの命を絶つ自由を自分もつており、いかなる力をもつた暴君もこの自由を奪うことはできないと知っていたのです。しかしフランクはこの人間の選択の自由というものを、まったく新しい現代的な相の下で見えています。現代において多くの人々がこのような自由を否定しようとしています。我々の行動はDNAで決まっているというのが現在のやりの言葉とも言えます。しかしフランクは断固主張します。

「かつてフロイトはこう言った『たくさんのいろんな人たちをみんな同じような飢えにさらしてみればどうな

るだろうか。その飢えが我慢の限界を越えてつよくなるにつれて、一人ひとりの違いは不鮮明になり、それに代わって満たされない飢えを表現する一つの同じ行動だけが現れてくるだろう」と。しかし強制収容所では、この逆こそが真理であった。人々はますます、その多様さを際立たせていったのである。獣性が正体を現し、そして同時に聖なるものも姿を現してきた。飢えていたことではみんな同じであったが、人々は一人ひとりみんな違っていた。実際、カロリーは重要なことではなかったのである。結局、人間はその人の直面している条件に支配されてなどいない。むしろ逆に、その条件の方こそ、人間の決断いかに支配されているのである。意識するしないに関わりなく、人間は決断を下している。勇敢に立ち向かうか、それともくつするのか。条件によって決されるがままの自分しておくか否かを」

それぞれが異なつた態度を取りうるし、実際取ってきているのです。そしてこのそれぞれの独自性をもとに、彼はこの本で最も貴重な呼びかけをします。それが「生の意味についてのコペルニクスの転回」ということです。

「反対に何の生活目標をもはや眼前に見ず、何の生活内容もたず、その生活において何の目的も認めない人は哀れである。彼の存在の意味は彼から消えてしまふのである。このようにして全く抛り所を失つた人々はやがて倒れてゆくのである。あらゆる励ましの言葉に反対し、あらゆる慰めを拒絶する彼等の典型的な口のきき方は、普通次のようであった。「私はもはや人生から期待すべき何もも持っていないのだ」。これに対して人は如何に答えるべきであろうか。ここで必要なのは、生の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何を我々はまだ期待できるかが問題ではなく、むしろ人生が何を我々から期待しているかが

問題なのである。そのことを我々は学ばねばならず、また絶望している人間に教えねばならないのである。哲學的に誇張して言えば、ここではコペルニクスの転回が問題なのであると言えよう。すなわち我々が人生の意味を問うのではなく、我々自身が問われた者として体験されるのである。人生は我々に毎日毎時、問いを提出し、我々はその問いに、詮索や口先ではなくて、正しい行為によって応答しなければならないのである。人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行なうことに對する責任を担うことに他ならない」<sup>⑤</sup>

彼は、もはや何も期待すべきものは自分にはないと絶望し、崩れていく者に対して、コペルニクスのな、つまり百八十度の転回をせまります。確かに、我々は、これから何が自分に起こりうるか、未来に何を期待しうるかというのを最大の関心事としています。それが自分の思うようにならず、期待どおりに実現しない場合、絶望してしまいます。氣を取り直してみますが、繰り返し期待を裏切られ、希望を持ちえなくなれば、くず折れてしまいます。しかしフランクはここで転換を求めます。「生の意味の問いについてのコペルニクスの転回」ということを言います。我々は生に、何が期待できるかと問う者ではなく、我々自身が問われた者として体験されると語ります。問う側に立つのではなく、問われている者として自分を見るということです。誰が問うのか。フランクはユダヤ人であったから、ユダヤ教の神を信じていたから、問われる者として自分を体験したが、神や宗教をもたない自分にはそんな転回はできないと言ひ逃れる人があるかもしれません。しかしフランクがここで述べているのはそういうことではないのです。問うているのは、彼が置かれているこの絶望的な収容所という状況全体なのです。彼は、この状況全体を自分に対する問いとして受け止めているのです。彼には愛した奥さんがいました。しかし別れ別れにされ

てしまいました。有能な精神病理学者としての未来を根こそぎ奪われてしまいました。その絶望的な状況の全体が、「ところでお前は、これに対して、どのような態度を取るのか？ 単に絶望して呪うだけにとどまるのか、それともこのような状況においても、より悲しみと苦悩と弱さの内にある人々の傍らに立つという態度を取るのか、それはこの状況だから必然的に一つしかない道ではなく、お前が選ぶうる多くの自由な道なのだ」という語りかけとして理解しています。

このコペルニクスの転回ということについても少し考えてみましょう。フランクフルは私に何が与えられるかと問うことが重要なのではなく、問われている者として立つことが大事だと言います。私に何が与えられるかと問うというのは、自分の思うがままにでなく、私にいわば降りかかってくるものを自分に一番大事なことで考えることです。私たちは実際そうしています。私たちが願っていることは必ずしも自分の意のままにはなりません。入りたい大学、つきたい就職があっても、願っているようには必ずしも実現されません。私たちの関心の九九パーセントがこの私に降りかかってくるものの良し悪しに集中しています。それによって、喜んだり悲しんだり、まさに一喜一憂しています。フランクフルもそれを否定しはしません。しかしそれだけが唯一大事であるかのごとく、いわば痙攣し緊張に震えてその与えられるものは何かと問うことに、待て、というのです。それも大事だけれど、もつと大事なものがあるというのです。私の意のままにならず、私に対して生じ、降りかかってくるものだけにだけ目を向けて、血眼になるのではなく、その私の意のままにならず、やってくるものに対して、私がどう対応し、どのような態度をとるか、本当に大事にしなければならず、目を注がねばならないのは、むしろこの後の方の自分の応答なのだと言うのです。人の目を引くのは、外から降りかかるものなのでしょう。それに対する私の応答、どう態度をとったかは人々の目に留まりにくいのかも知れません。しかし本当に大事なものは、あるいは唯一大事なのは、この私の応

答なのだということです。

もう一つ、このコペルニクスの転回ということを考えてみなければならぬのは、自分の置かれた状況が自分への問いとなるのはどういうことか、ということ事です。問いかけるものとしてフランクが考えているのが、自分に与えられた具体的状況そのものだととして、どうしてそれが私に問いかけとなるのか、ということ事です。試験に合格したこと、恋人にふられたこと、ただその事実があるだけで、それは事実という沈黙したものであり、それがわたしにとっての問いかげなどするはずがないではないか、と反論されるかもしれません。

それに対して三つのことを示唆しておきたいと思います。一つは、自分の置かれた具体的状況が問いとなり、自分が問われていると自覚されるということが起こるのは、その状況に対して自分が取りうるのは、唯一つではない、と気づく時にだということ事です。恋人に裏切られるなら誰もが絶望し、恋人を殺したいほど憎む、それ以外にないそれは必然の避けがたいことだとも言われるかもしれませんが。しかし最初の反応は同じだとしても、その後の立ち上がり方は人それぞれです。恨みぬくか、その傷を抱えながらも、相手の立場、気持ち、事情に思い至るか、そのような絶望的な状況にも、様々の態度を取ることができると気づくとき、お前はどこうするのだと問われる立場に立っているとフランクは言うのです。

第二に、しかしおそらくそれだけでは、いまだ状況が問いかけてくるとまでは言えないでしょう。問いかけとは「このような状況において様々な可能性がある中で、お前は何を選ぶのか」ということです。単に様々な可能性があるということではなく、その中の一つをどれにするのかとの問いかけです。よく自由とは様々な可能性が有ることだと言われます。それは正しいのですが、まだ半分の真理です。自由というのは、様々なことが出来る、可能であ

るという浮遊状態のことですべてではありません。それは事柄の半分です。そのような可能なものの中から、私はこうすると、自分の固有の行為を為し、自らの答えを為してゆく時、自由のもう半分が成るのです。ですから状況が問いになるということは、自分が様々な可能性の前に立っているということに気づき、さらにその中から私はこれがしたい、これをするという唯一つのことを迫られることなのです。

もう一つ第三に言っておきたいのは、そのような発見、自分は様々な可能性のもとに立たされており、その中で一つを選んでゆかねばならないということに気づいたそのことを、最も貴重なこととしてそこから目をそらさないことです。その自分の場に立つということを生きるうえで最も大事な価値あることとして肝に銘じることです。それが問いかけを聞くということ。「様々の態度を取りうる」という、言葉としては平凡な、当たり前と思われることが、自分にとって最も緊急のこととして迫ってくる時、問いかけということが言われるのです。フランクが問われている者として立つという少し宗教的な言い方で言っていることは、この発見、気づきの全体が、のつぴきならぬ事柄として自分に迫ってきているということです。彼の前に生死を決する刃のようにこの事実が突きつけられているのです。

フランクは、毎日凍りついた荒野で穴掘りのような労働をさせられています。どんより曇った空の下、凍りついた雪の原で、「ああ、そういうことなのか、自分が今しなければならぬことはただ一つ、この「お前はどうか」のか」との問いかけに、「私はこうする」と答えること、それだけでいいんだ、と深く息づき領いているフランクの姿を見るような思いがします。おそらく誰から見捨てられ、忘れ去られて死んでゆく自分を覚悟していたでしょう。しかし、今自分がしなければならぬのは、この問いに答える、それだけでよいのだと分かったのです。結果として過ちをするかもしれません。しかしそのことは二の次なのです。お前はどうかするのか、との問いに、私

はこうすると、一つの答えを行為するそのような「自分の場所」に立つことが、一番大事なことだと分かることが大事なのです。

こうしてこの「コペルニクスの転回」と、カフカの問題が不思議な対応をみせてきます。

「ところで具体的な運命が人間にある苦悩を課する限り、人間はこの苦悩の中に一つの課題、しかもやはり一回的な運命を見なければならぬのである。人間は苦悩に対して、彼がこの苦悩に満ちた運命と共にこの世界で唯一人一回だけ立っているという意識にまで達せねばならないのである。何人も彼から苦悩を取り去ることはできないのである。何人も彼の代わりに苦悩を苦しみ抜くことはできないのである。まさにその運命に当たった彼自身がこの苦悩を担うということの中に、自らに固有の行為を果たすことに対するただ一度の可能性が存するのである。強制収容所にいる我々にとつては、それは決して現実離れた思弁ではなかった。かかる考えは我々を救うことのできる唯一の考えであつたのである！ 何故ならばこの考えこそ生命が助かる何の機会もないような時に、我々を絶望せしめない唯一の思想であつたからである」<sup>⑩</sup>

「具体的な運命が人間にある苦悩を課するかぎり」と抽象的に言われていますが、フランクル自身の問題で言えば、ヒトラーのナチズムがユダヤ人であるフランクルからあらゆる幸福と希望、愛する妻さえも奪ってしまったのです。彼は繰り返し、「何故私がかんな苦しみを受けねばならないのか」と沈黙のうちに心の中で叫んできたと思います。この問いを問うフランクルに、そして私たち一人ひとりに対して、先の人生の意味の問いに関する「コペルニクスの転回」ということが深い意味をもつてくるのです。どうしてこんな苦しみを、ほかの人でなく、この私を受けね



ばならないのか、と答えない問いを咳かざるをえない私たちに対して、あなたがしなければならぬ最も大切なことは、何故と問うことではなく、自分が問われている者として「お前はどの状況でどうするのか」との問いに答えることに集中することだ、と言うのです。苦悩を含んだ与えられた自分の状況の全体を問いとし、お前はこれに対して、「どう答えるのか」と問われている者として立つこと、これが最も重要なことだと、フランクは気づいたのです。運命を呪い、神も仏もあるものかと絶望のうめきにくず折れるのも、一つの答えでしょう。しかしそれは、水が上から下に流れるような、誰もがそうなる必然ではないのです。まさにお前の答えであり、それがお前だ、それが私だと定まるものなのです。このような状況な中でも、さらに一層苦悩にさいなまれている人々に慰めの言葉をかけうる人もいるのです。

注意してほしいのは、ここでフランクが、「コペルニクスの転回」によつて、自らを問われている者として引き受けた時、つまり彼は、自分がこの「苦悩に満ちた運命」を自らに向けられた問いとした時、この世界でただ一人立っているということに気づいたのです。どうしてでしょうか。彼は言います「何人も彼の代わりに苦悩を苦しめぬことはできない」からであると。これは強制収容所というぎりぎりの限界状況を生きたフランクだけの問題ではありません。平凡な我々一人ひとりに当てはまることなのです。自らを問われた者として、全体を問いとして受けとめる時、初めて人は、他の誰でもなく、私が問題なのだということを示されるのです。それ以外の時、我々は大勢の中の一人に過ぎません。確かにそのように私たちは、人々の中で、社会の中で、生きています。私たちは、この聖学院という大学機構の一メンバー、一学生です。それは否定しようのない事実です。それを否定して自分が特別の者であるなどと思うのは、僭越であり、わがままでしかありません。しかしその事実を否定しないまま、私が、世界にただ一人の者であることが、明らかになる場がありうるのです。フランクが「人生の意味の

コペルニクスの転回」として見出したのは、そのような場の発見だったのです。この場は「さあどうする、どうするか」と選択を迫られて、どちらかに決めかねて脂汗を流すしかないような、選択の場ではありません。その選択が間違つたとしても、もう一度「私はこうする」と答えの行為をなす勇氣が与えられているような場所です。ですからこれは、キリスト教の中で否定される律法主義、自らの業を誇るパリサイ人の言葉ではないのです。フランクフルは、人間が真にそこで生きることが許されている「場所」、そこでこそ生きる勇氣を与えられる場所を見出しているのです。

## おわりに

私は話をカフカの謎めいた短編小説から始めました。その話の奇妙さは、一人の田舎から出てきた男が、自分だけに定められた門に入らないまま死んでしまうということにあります。門と道は、すべての人に開かれた共同のもので、自分だけに定められた門などあるはずがない、という私たちの常識に逆らう、奇妙さが、この話のポイントでもあります。カフカは、「自分だけに定められた門」がどのようなものであり、どうしてそのようなものがあるのかについては、述べていません。謎を浮き立たせて、微笑しながら立ち去ったように思われます。フランクフルの「コペルニクスの転回」はそれに対する一つの答えを暗示しているように思われます。自分だけに定められた門が何か初めからあるのかとありません。私たちがそれぞれ、何故この私がかようなひびくことに、このような運命にあわねばならないのかとの問いに呻くとき、その問いを胸に秘めつつ、問う者から問われている者であると、百八十度姿勢を換える時、そこに私だけに定められた門と道とが見えてくるのです。このような世界の中で唯一の

者として自分を受け取ることが、魂としての自分を知ることであり、ここがかつて人々が宗教という言葉で問題にしてきた事柄に関してはじめて、その意味を理解しうるようになるのだと私は考えます。「魂のことをする」というのは、そのように、それぞれが自分の生を真に一時的なものとして受けとめ直して生きるということだと思えます。しかも選択を間違えまいとして緊張にぶるぶる震えながら、一回限りの選択をするというのではなく、間違いをなし、不器用にしか生きられない者もお、世界に一人しかいないかけがえない者であり、自分にだけ定められた門に入っていくことを許されてあることをひしひしと感じて生きることです。

(二〇〇八年十二月十日、聖学院大学人文学部講演会(創立二十周年記念行事)の講演を書きあらためたもの)

注

- (1) 大江健三郎『宙返り』(下) 講談社、一九九七年、四七七頁。
- (2) カフカ論はあまたあるが、M・ロベールの『カフカの如く孤独』(東宏治訳、人文書院、一九八五年)とM・ブランシヨの『カフカ論』(粟津則雄訳、筑摩書房、一九七七年)は秀逸である。
- (3) 「掟の前」に関する解釈も盛んで、J・デリダは日本での講演の一つをこの寓話の解釈にあてているほどである。『カフカ論——「掟の前」をめぐる』朝日出版社、一九八六年。深く領かされるのはW・ベンヤミン「一枚の子供の写真」(『ベンヤミン・コレクシヨ、Ⅱ』所収、筑摩書房、一九九六年)における「掟の前」解釈である。
- (4) M・ロベールは前掲書(一七五頁)で「この田舎者が破滅するのは、守衛がその強権を体現しているような集团的タブーの上位に、彼個人の律法を敢えて置こうとしないからである」と述べている。
- (5) V・フランクル『夜と霧』、霜山徳爾訳、みすず書房、一九六一年。

- (6) 同書、一〇三―四頁。
- (7) 同書、一六六頁。
- (8) V・フランクフル『生きる意味』を求めて』上嶋洋一、松岡世利子訳、春秋社、一九九九年、六九―七〇頁。
- (9) V・フランクフル『夜と霧』一八二―三頁。
- (10) 同書、一八四―五頁。